

## テル・ハメディヤート—そのⅡ

## Telul Hamediyāt near Tells Gubba and Songor: part II

川又正智\* (Masanori KAWAMATA)

The part I of this report was published as the chapter V in *Preliminary Report of Excavations at Gubba and Songor* [Fujii and Ii, eds., 1981].

Four types of remains were found in the eastern part of Telul Hamediyāt as follows:

- 1 The building with storage rooms for big jars (Fig.1: A; Figs.2-13) [Fig.58: 3—11; Pl.23: 2, 3, 5, in the part I]. Most of the big jars were lined with bitumen.
- 2 The single-room-buildings with gypsum and bitumen lining (Fig.1: B, C, D, G, H).
- 3 The winery-like building with gypsum and bitumen lining (Fig.1: E; Figs.14,15) [Pl.23: 4, 6, in the part I].
- 4 Pottery kiln (Fig.1: F) [Fig.58: 1, 2; Pl.23: 1, in the part I], which shall be reported in the forthcoming part III.

国士館大学調査団（代表者藤井秀夫教授）は、テル・グッバとテル・ソンゴルと共に、テル・ハメディヤート東部第一報を先に本誌に報告した〔藤井・井 編 1981：第V章、および第I, XII 章参照〕（以下、そのI、という）。本稿はその続編である。

調査箇所はテル・グッバ中央からおおよそ南25度西へ700 mのあたりである。検出遺構は次の4種である：

- 1 大型土器置場のある建物（図1—A）
- 2 石膏張小室建物（図1—B, C, D, G, H）
- 3 醸造場らしい建物（図1—E）
- 4 土器窯（図1—F）<sup>1)</sup>

周辺には他にまだ多数の遺構が地表で見え、北北西へテル・ハバリーにつづいてゆく。東北方のテル・ソンゴルA, B, そしてテル・グッバ、またナリン川対岸にも同時代らしい遺跡がある。

## 1 大型土器置場のある建物A（図1—A）

## 1-1 遺構

現在の地形ではテルが東南斜面で入江状になっていて、その入江の奥の部分にある。傾斜のゆるい所で、耕地になっている周辺平面からは3 m ほどたかくなっている。他の遺構もそうであるが、テル・ハメディヤートは、

\* 国士館大学教養部

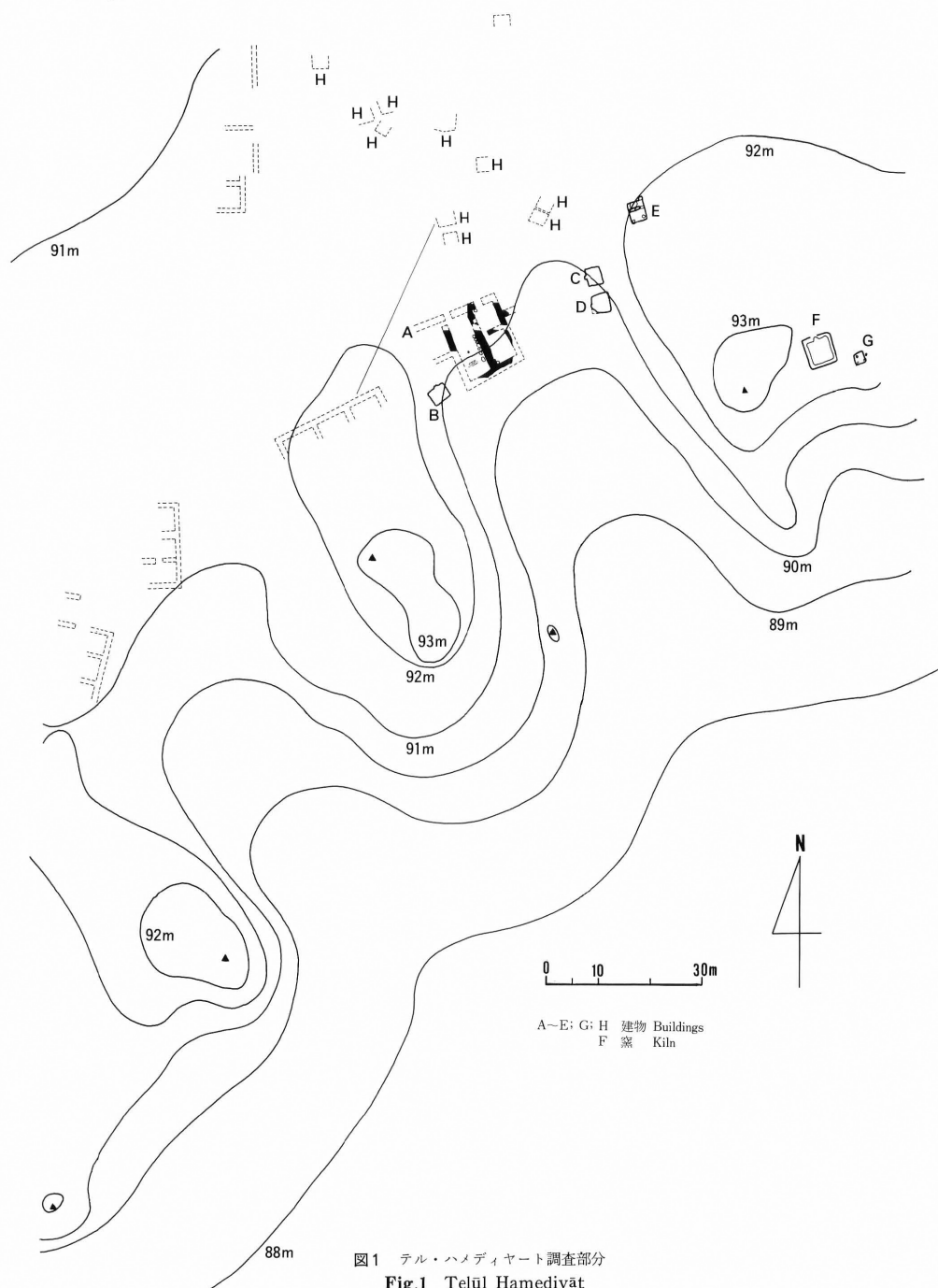


図1 テル・ハメディヤート調査部分  
Fig.1 Telul Hamediyat



図2 作業開始時のテル・ハメディヤート 右後方はテル・グッバ 西南より東北をのぞむ  
**Fig.2 Telūl Hamediyāt and Tell Gubba, from the south-west**

全体に浸蝕されているテルで、積もってたかくなってきたテルでなく、遺跡としての遺存状態はわるい。遺物も原位置ではない物がおおいであろう。

この建物Aは半地下式で、西南側に  $4.6\text{ m} \times 12\text{ m}$  の、東北側北に  $4.0\text{ m} \times 4.8\text{ m}$ 、東北側南に  $4.0\text{ m} \times 5.5\text{ m}$  の2室、計すくなくとも3室がある。壁厚  $0.9\text{ m} \sim 1.3\text{ m}$ 。

西南の室は、西隅に出入口があったようで、室内には多数の土器が床上〔その I・Pl.23-2〕および中央南よりの泥煉瓦製台の上(図3)〔その I・Pl.23-3〕に置いてあった。台上の土器は口部を上にならべてあるいは横たえて置かれていたらしい。その I で述べた入籠になっていた土器は台上のものである。床上には特に大型の土器〔その I・Pl.23-2〕(図5やその I・Fig.58-10; Pl.23-4 も同型)が口部を下に東北の壁にたてかけて置いてあった。したがって使用中の土器ではない。

土器台とみえたものは形状を明確には検出できなかったが、筋の非常に多い泥煉瓦造で、焼けた部分があり、本来は竈であったかとおもう。

東北側北室は西北に出入口があり、北隅に排水の設備がある。西南壁に沿って、南室への出入口がある。南室からは、封泥が出土した(図13)。

## 1-2 遺物

### 1-2-1 土器

この建物出土品には大型品がめだつ。テル・ハメディヤートでは全体に把手付土器が表面採集でめだつのであるが、ここではそれほどでない。

図4；その I・Pl.23-3： 高  $65\text{ cm}$ 、胴径  $45\text{ cm}$ 、口縁径  $17\text{ cm}$ 。砂粒のおおい白っぽい胎土で、もろい。施文は手指で引いてある。ナリン対岸でテル・グッバのほぼ真西  $1.7\text{ km}$  にあるテル・アルワーン(約  $60\text{ m} \times 40\text{ m}$ 、比高  $1\text{ m}$  余のテル、未調査)にも同様な破片が分布していた。

図5；その I・Fig.58-10： 特大品で、残高  $103\text{ cm}$ (推定全高  $120\text{ cm}$ )、胴径  $63.9\text{ cm}$ 、口外径  $20.8\text{ cm}$ 。

$100\text{ l}$ 以上の容量がある。轆轤造。やや緑がかった淡灰色で、焼成良好。極小の黒砂をふくむ胎土。口径

が相対的にちいさいのは封しやすく、気ぬけをふせぐためであり、底の突出は澱溜であって、醸造品用のものであろう。内面にアスファルト塗布。この形態のはここでは非常に多量で、1—1で述べた室内床上にならんでいたのもこれであるし、その中にはマーク付（図6；そのI・Pl.23-2）もあった。図7—11, 18, 22；図8—32, 33等もこの型であらう。図1—E, Fの醸造場、土器窯からも出土している。この型は内面にアスファルトを塗布したものが多く、なにか醸造の上で有効なことであるらしい。胴部の小孔は焼成後にあけられている。2孔あって、上のは径0.9 cm、下のは径0.4 cmである。まったく同型のはともかく、おおまかには、ローマ世界内外でひろく出土する土器である。

このちかくでは、テル・アバスによく似たものが出土している〔Boehmer u. Dämmer, 1985: Taf. 166〕。テル・アブーグバーブ〔Ratib, 1979: p.580〕やテル・フバーリー〔Fadil, 1979: p.597〕にも報ぜられている。

図7—1；図10： 径 15.3 cm, 高 4.1 cm。外から内に2小孔をうがつ。これは蓋で、小孔は紐通であらう。

軟質で赤褐色、砂粒のおおい胎土。轆轤造の上内外ナデ、天井部篋。

図7—2： 蓋。天面径 4.9 cm。轆轤造。

図7—3： 蓋。径 15.5 cm, 高 5.1 cm。轆轤造。

図7—4： 径 7.5 cm, 高 3.0 cm。轆轤造。軟質。完形。

図7—5： 蓋。天面径 4.3 cm。轆轤造。

図7—6： 蓋。径 16.2 cm。轆轤造。

図7—7： 径 15.6 cm, 高 5.3 cm。轆轤造。軟質。完形。内面と外面上部に炭化物多量に付着<sup>2)</sup>。

図7—8： 口縁外径 10.3 cm。轆轤造。スリップあり。把手痕あり。

図7—9： 口縁外径 15.0 cm。轆轤造。外面一部分に煤付着。

図7—10： 口縁外径 18 cm。硬質精製。轆轤造。

図7—11： 口縁外径 21.1 cm。轆轤造。内面にアスファルト。

図7—12： 口縁外径 14.0 cm。轆轤造。内面にアスファルト。

図7—13： 口縁外径 17.0 cm。硬質精製。轆轤造。

図7—14： 口縁外径 18.0 cm。精製。轆轤造。焼成前に刺突文と浅沈線の波状文をほどこす。内面黒色物。

図7—15： 口縁外径 30 cm。精製。轆轤造。明青色釉が一部残存。

図7—16： 口縁外径 18.5 cm。轆轤造。内面全体にアスファルト。

図7—17： 口縁外径 37.6 cm。轆轤造。やや軟質、大型。

図7—18： 口縁外径 18.5 cm。精製硬質。轆轤造。内部と口唇部上面にアスファルト。

図7—19： 口縁部小片。深緑色釉。

図7—20： 口縁部小片。精製硬質。緑青色釉。

図7—21： 口縁外径 15 cm。硬質。轆轤造。ウォッシュあり。

図7—22： 口縁内径 13.0 cm。轆轤造。水引。内面全部と外面口縁部にアスファルト。

図7—23： 口縁外径 16.0 cm。やや軟質。轆轤造。内面全部にアスファルト。

図7—24： 口縁外径 30.4 cm。硬質。轆轤造。斜刺突文と凹線。

図8—25： 最大径 26.4 cm。砂すくなく精製。輪積ののち轆轤引。



- 図8-26： 胴径 15.3 cm以上。轆轤造。
- 図8-27： 胎土に砂粒多。轆轤造。外面一部に煤。沈線 4 本。
- 図8-28： 胴径 23 cm 以上。精製。轆轤造。2 把手。把手は貼付で、残存上端幅 3.5 cm。口縁はもうすこし上方である。
- 図8-29： 黄褐色で砂のおおい胎土。轆轤造。貼付横把手で、中央部幅 3.2 cm、指おさえ痕が装飾的。表に白ウォッシュ。内面全体にうすく炭化物。
- 図8-30： 胴径 16.8 cm。精製。轆轤造。外面スリップ。高台貼付。内面の一部にアスファルト。
- 図8-31： 高台外径 10.5 cm。精製硬質。轆轤造。
- 図8-32： 残高 8 cm。やや硬質。手捏。しぼりによる底部澱溜。底面は筧削。
- 図8-33： 残高 16.5 cm。手捏。しぼりによる底部澱溜。内面にアスファルトあつく付着。
- 図8-34；図11： 残高 67 cm，径 53.5 cm。砂粒のおおい緑がかった胎土。輪積後上半轆轤引。本体仕上後さらに粘土をはって、手指で施文。図4と同技法である。
- 図8-35： 胴径 39.8 cm。輪積後轆轤引，底部はしぼり。胎土に細黒砂ややおおく，外面に緑がかった白のスリップ。

その I・Fig.58-9： 高 20.4 cm。精複。轆轤造。肉厚もおもい。底は紐切。完形。三重入籠になっていた中心物。

その I・Fig.58-11： 高 46.4 cm，胴径 32.3 cm。胎土に黒砂をふくむ。輪積後轆轤引。底をしぼって高台をつける。2 把手。把手下に沈線 3 条。完形。

図9はこの建物内床土隅でかたまっていた一括出土したものの一部である。1-1 で述べた土器台の下にあった。

- 図9-36： 口縁外径 21.3 cm。特大型土器の口縁。胎土に砂を多量にふくむ。轆轤造。約 1.5 cm ずつ引きあげている。スリップ有。
- 図9-37： 口縁外径 17.5 cm。轆轤造。スリップ。
- 図9-38，39： 残高 13 cm と 11 cm。手捏。しぼり技法による，特大型土器底部澱溜。内面は黒色物質が付着。
- 図9-40： 径 38 cm。砂を多量にふくむ。轆轤造。約 1.5 cm ずつ引きあげている。スリップ。
- 図9-41： 口縁内径 7.8 cm。轆轤造。スリップ。内面全部と外面上端から約 2 cm 黒色物付着。
- 図9-42： 口縁内径 9.6 cm。轆轤造。スリップ。把手は両側であったかもしれない。
- 図9-43： 高台外径 7.2 cm。赤褐色胎土で砂をふくむ。轆轤造。薄手。外面スリップ。内面不明。

#### 1-2-2 ガラス器等

- 図12-1；その I・Pl.23-5 上： 切子碗底部。最大厚 0.8 cm。中心は径 2.0 cm の円形カット。カットは互に接触していない。銀化して、すこし緑色のまじった白銀色。
- 図12-2；その I・Pl.23-5 下： 黒色に銀化。放射状の筋は菊花状になっているものであろう。長円形皿か。
- 図12-3： 脚外径 2.9 cm。白色に銀化。内面は緑色。
- 図12-4： 白色ねりものの玉。長 3.5 cm，径 2.5 cm。外面は石膏が付着しているが本来はなめらかであつたらしい。

その I・Fig.58-3： 径 9 cm。厚 0.35~0.20 cm。黒色に銀化。中は象牙色。

その I・Fig.58-4: 碗底。高 3.9 cm, 径 8.7 cm。緑色に銀化。

その I・Fig.58-5: 薄手の碗で, 高台は中空。高 4 cm, 径 11 cm, 厚 0.10~0.15 cm。

その I・Fig.58-6: 脚外径 12.4 cm, 厚 0.10~0.15 cm。金色に銀化, 中は虹状紫色。脚は折りまげ。

その I・Fig.58-7: 径 4.2 cm。黒色と銀色混。

その I・Fig.58-8: すこしとがった丸底で, 底厚 1.1 cm。白色に銀化。

図13: 封泥2点。左の1点は人物横顔を中心に, 周囲にバフラヴィーらしい文字を配す。印面径 1.3 cm。

もう1点は, 鳥文かあるいは人物横顔か判然としない。印面径 0.9~1.1 cm。紐孔がとっている。

人物文のは, 裏面が曲面で, なにかまるい物に封されていたものであろう。

## 2 石膏張小室建物B, C, D, G

このあたりには, 1室からなる方形建物が点々とある。残存部分は, 掘りさげてつくった床面だけであって, その平面形以外のことは知るを得ない。床にアスファルトと石膏をはっている。遺物はほとんど出土しない。

図1—Bは 3.8 m×3.0 m。10回以上の石膏塗布が確認でき, 下から3回めにアスファルトをはる。西北辺中央がすこし突出する。

図1—Cは 3.3 m×3.5 m。西辺中央が突出。石膏の下には砂利がしいてある。

図1—Dは 3.5 m×3.5 m。西辺中央が突出している。

図1—Gは 1.9 m×2.3 m。床面は現地表下 0.3 m で, 西よりに2小穴がある。なにか液体に使用する目的であろうか。大型の土器突底(図15左と同型)片1点が, 東辺中央外 6 cm に出土。置いてあったものであろうか。床東南隅はすこしかくくなっている。

同様の建物は多数上記以外に地表面にみえた。図1でHとしてあるのは, 石膏張を確認したものである。

## 3 醸造場らしい建物E (図1—E ; 図14)<sup>8)</sup>

### 3—1 遺構

全体は 3.0 m×4.0 m, 2室の堅穴式建物で, 全面石膏とアスファルトをはっている。石膏とアスファルトのあつきはあわせて 0.5~1.0 cm である。

東北隅に幅 0.9 m の, 外の方がたかい階段出入口があり, さらに北室東壁に沿って南室に通じている。壁残存高は, のこりのよい所で約 0.6 m。厚さ 0.4 m の隔壁中央床上に土管(図15; その I・Pl.23-6)が1本あって, 入口側である北室(2.9 m×1.2 m)中央にある穴の上に出ている。この穴は, 床面で 1.5 m×1.2 m, 深 2.5 m である。この穴は上から溜めるのみの, 他に出口のない穴で, 内面にやはり石膏とアスファルトを塗っている。

奥である南室(2.9 m×2.1~2.4 m)には, 突底を上方にした大型土器底部(図15; その I・Pl.23-4)と, 口縁を下方にした図5と同型の大型土器口縁部が置いてある。他に遺物は無い。

南室の床は土管側がややひくく傾斜しており, 想像すれば, 南室でたとえば葡萄をつぶすとか何かの作業をし, その作業による液体を土管を通じて北室の穴にながし込んだのであろう。今のところは何か醸造に関係するものと推定している。あるいは製油とか染料関係であろうか。

両室境の敷居は高 0.16 m。

### 3-2 遺物

大型土器底部（図15左；その I・Pl.23-4）は、残高 48.0 cm、径 55.4 cm。上は人為的に切られたかのようにある。内面に付着物は無い。

土管（図15右；その I・Pl.23-6）は精製品で、全長 47.0 cm、外径 16.4 cm、厚 1.0~2.4 cm、轆轤造。

#### 注

- 1) そのⅢとして、本誌次巻に報告予定。そのⅠの Fig.58-1, 2 と Pl.23-1 はこの窯跡のものである。
- 2) 土器付着物の説明で、煤、黒色物、炭化物と記述したのは、だいたいアスファルトのことであるとともうが、確認できないので、今は実測者の記録どおりにしておく。
- 3) そのⅠで、建物Aと接している、としたのは、あやまりである。

#### 文献

藤井秀夫・井博幸（編）

1981 イラク、ハムリン発掘調査概報『ラーフィダーン』第Ⅱ巻。

(Fujii, H. and Ii, H. (eds.) 1981 Preliminary Report of Excavations at Gubba and Songor [Hamrin Report 6], *al-Rāfiḍān* Volume II, Tōkyō)

Boehmer, R.M. u. Dämmer, H.-W.

1985 Tell Imlihiye Tell Zubeidi Tell Abbas. *Baghdader Forschungen* Band 7, Mainz.

Fāḍil Maḍhloum Dāwud

1979 An Account of Excavation Operations at al-Khubāri Tells. *Sumer* Volume 35, Baghdād.

Rātīb 'Alī Faraj

1979 Tell Abū Gbāb. *Sumer* Volume 35, Baghdād.

#### あとがき

その1から10年ちかく、現場作業からは10年以上すぎ去ってしまった。我々の着手前、ドイツ考古学研究所調査団も本テルを発掘地候補のひとつとしたので、一緒にテルをみてまわったのもたのしい想出である。

このテルの現場作業は、当初を川又が、その後を篠原徹調査員が中心となって、他班の応援を得ながら担当した。現場記録は十分ではない。また川又、篠原とも現場作業のみにて帰国したので、遺物実測、清図、その他は、グッバ・ソンゴル各班の井博幸、大津忠彦、小口和美、鎌田博子、浜崎一志、松原隆治各調査員による。特に井調査員におおくをよっている。本稿図1 清図は松本淳子氏による。

（庚午夏）



南より from the south



東北より from the north-east

図3 土器置場の台 建物A

Fig.3 Pottery on the Stand, Building A



図4 土器 建物A  
Fig.4 Pottery, Building A

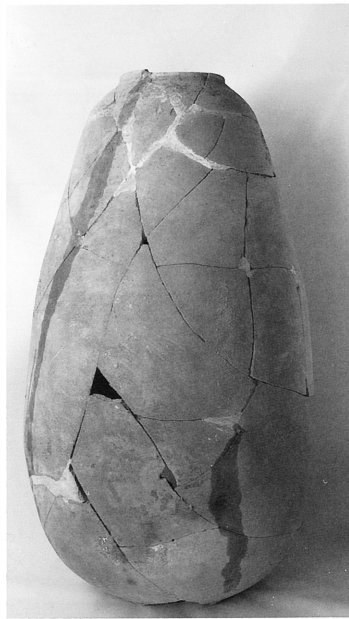


図5 大型土器 建物A  
Fig.5 Big Torpedo Jar, Building A



図6 大型土器上のマーク 幅：左：約 25 cm, 右：約 10 cm, 建物A  
Fig.6 Marks on the Torpedo Jars. Width: left 25 cm,  
right 10 cm, Building A

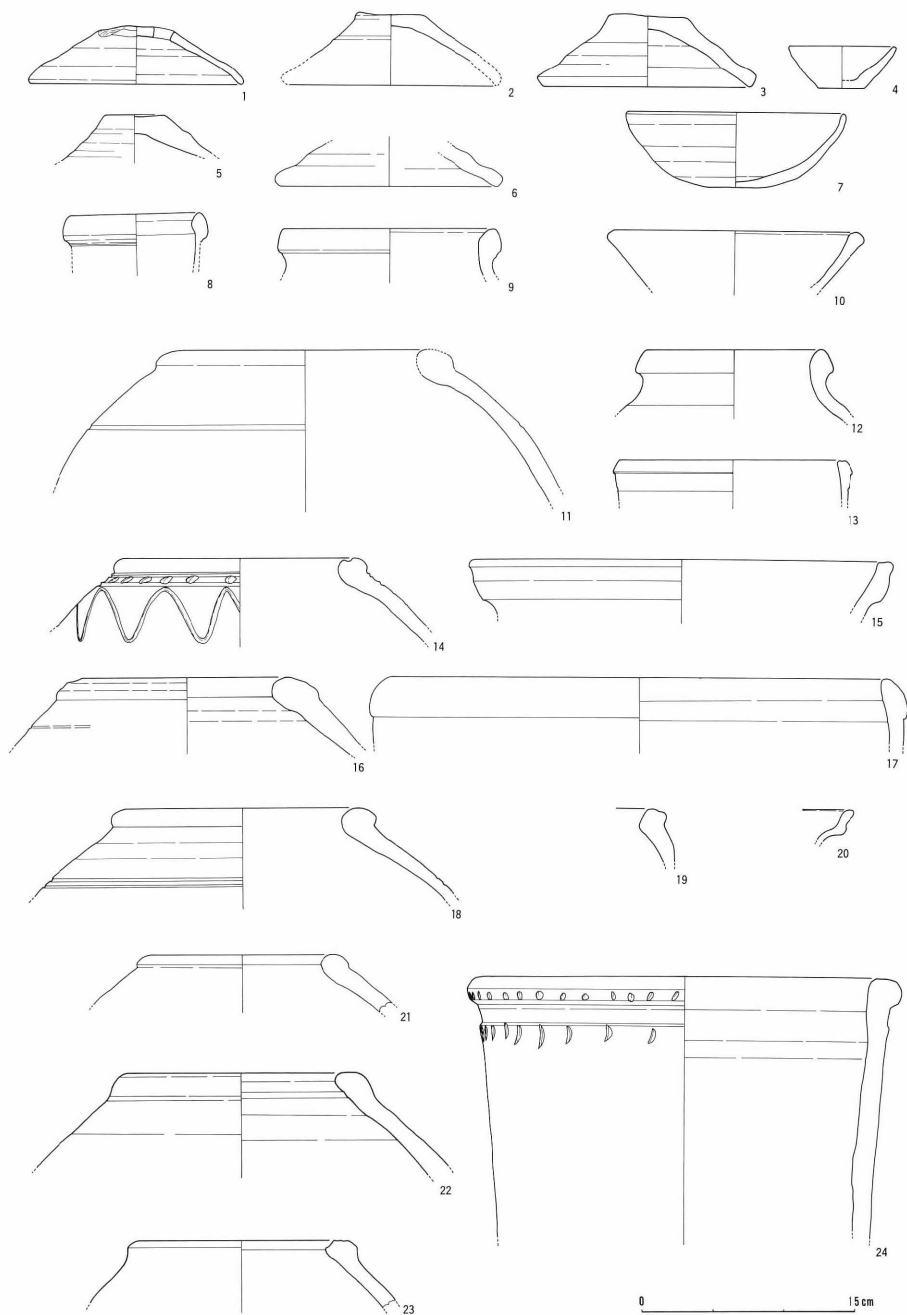


図7 土器, 建物A  
Fig.7 Pottery, Building A

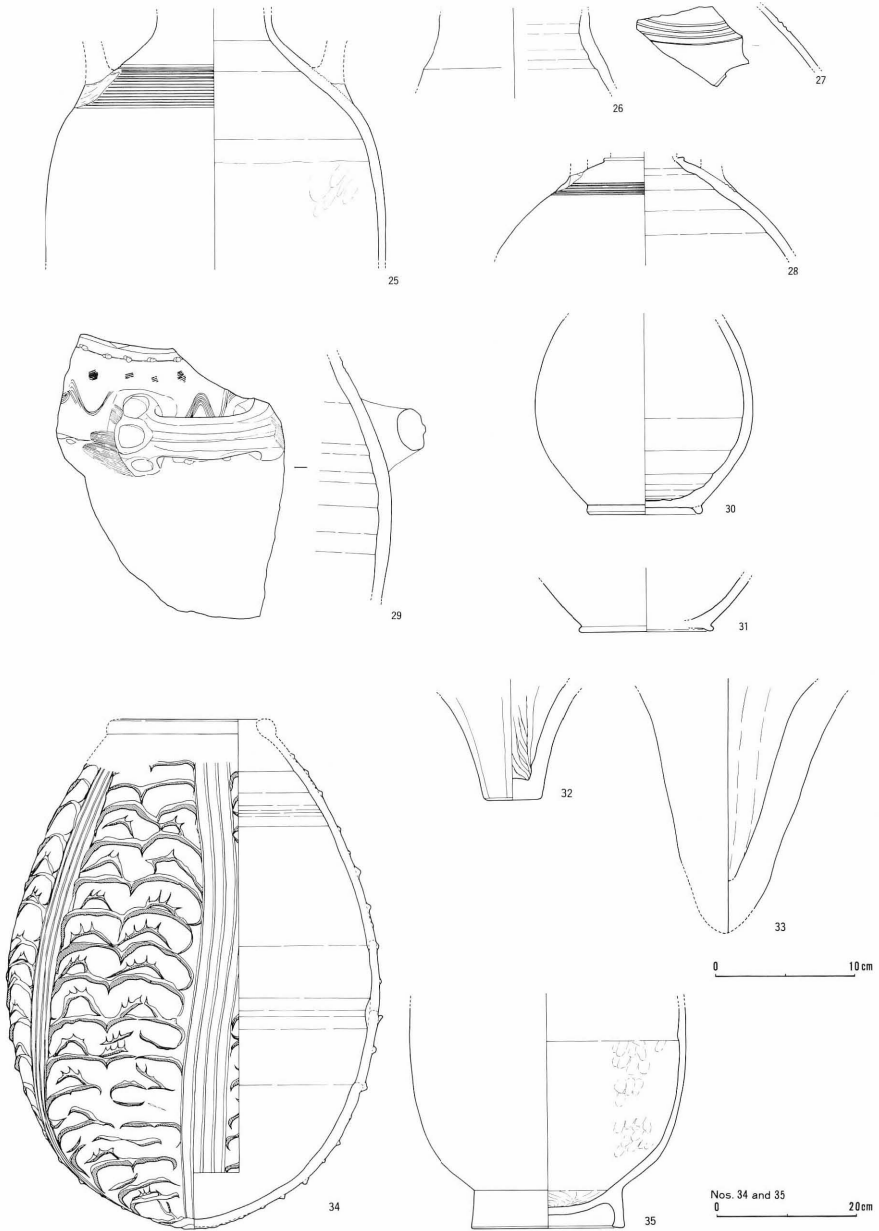


図8 土器, 建物A  
Fig.8 Pottery, Building A



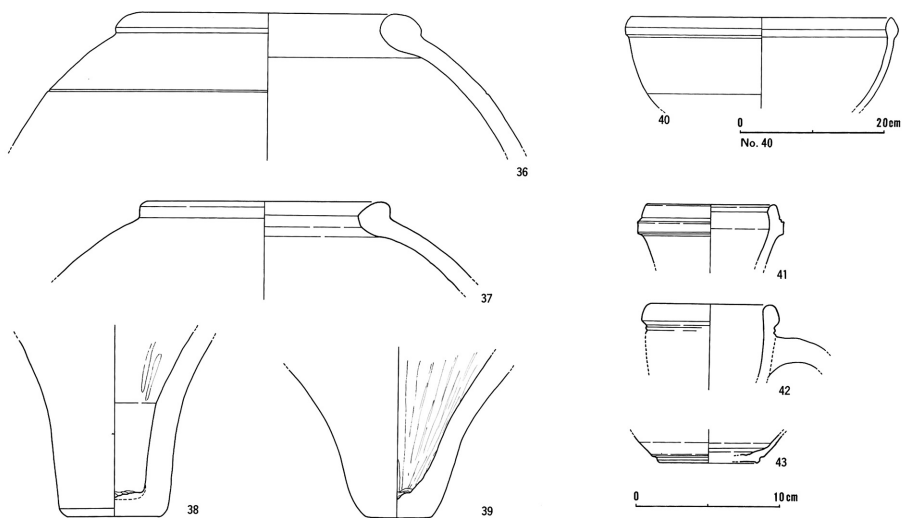


图9 土器, 建物A  
Fig.9 Pottery, Building A



图10 土器, 建物A  
Fig.10 Pottery, Building A



图11 土器, 建物A  
Fig.11 Pottery, Building A

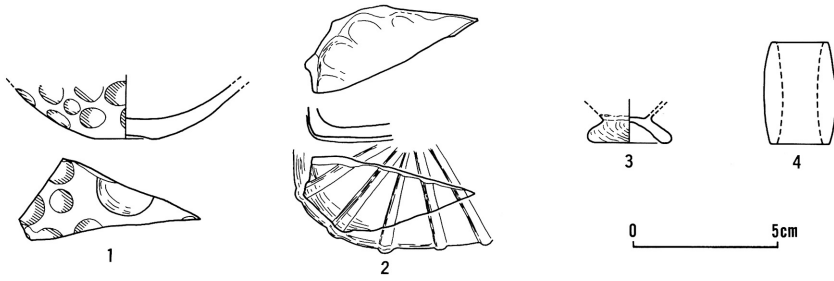


図12 ガラス器（1, 2, 3）と練物（4），建物A  
**Fig.12** Glass (1, 2, 3) and Faience (?) (4), Building A

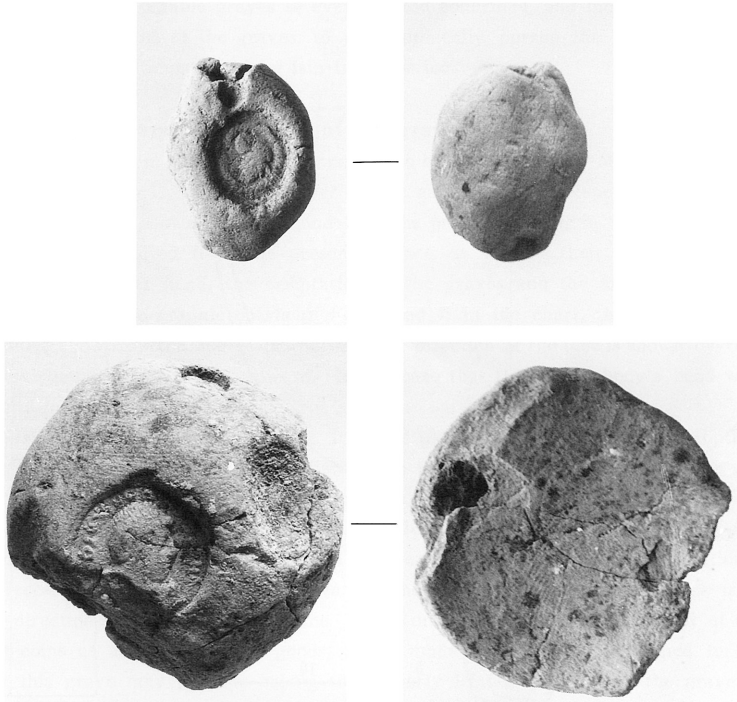


図13 封泥，建物A  
**Fig.13** Bullae, both sides, Building A



図14 醸造場らしい建物E, 東より  
Fig.14 Winery-like Building E, from the east

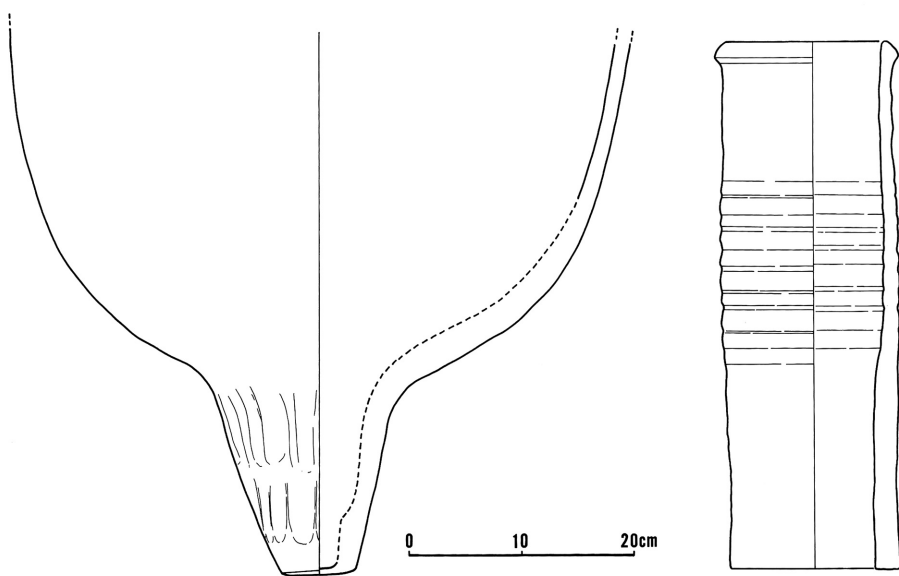


図15 土器・土管, 建物E  
Fig.15 Base of Torpedo Jar and Drain-pipe, Building E